**入れ墨**

アイヌ文化において、入れ墨は女性だけのものでした。入れ墨は邪悪な霊から身を守り、その女性を共同体の目から見て美しくし、その女性が成人したことを示すとともに死後の世界に向けて準備をするものと信じられていました。アイヌの入れ墨師は常に女性で、通常は祖母か母方の叔母が務めました。入れ墨の技法は母から娘へと伝承されました。

入れ墨は通常、少女が思春期を迎える 12 歳か 13 歳頃から始められました。入れ墨師は小さな刀で上唇に細かい切り込みを入れ、そこに白樺の煤とヨモギから作られた墨を擦り込みました。その結果、特徴的な濃紺色が生まれました。

15 歳か 16 歳頃、アイヌの少女は下唇にも入れ墨を施されました。この段階で、刺繍を施した鉢巻きとビーズの首飾りも与えられました。20 歳頃までには入れ墨が完成し、それは結婚の準備ができたことを象徴していました。口の周りの線は顔の横に向かって延長され、特別な機会のためのより手の込んだ首飾りと金属の耳飾りが贈られました。

1871 年、日本政府はアイヌを和人（民族的日本人）社会に同化させる政策の一環として、アイヌ女性の入れ墨を禁止しました。当時の記録によると、多くの女性たちは入れ墨がな

ければ結婚できず、死後の世界にも行けないと信じていたため、この法律に従うことを拒みました。